

〈奥〉の風景

— 日本古典文学にみる「すまい」の建築論 —



伏羲（矩）と女媧（規）



竹中大工道具館

川本 豊 博士(工学)
(福井工業大学 市川研究室)

プロローグ：「すまい」のイメージとして — 生と死と —



中国四川大地震 5月12日発生 (M7.9)
(朝日新聞2008年5月20日)



バチカン・システィーナ礼拝堂
神の手がアダムに命を吹き込む

1. 研究の端緒となった文献

- 槇 文彦（1928～2024）（母方の祖父が14代竹中藤右衛門） ← 建築学
「奥の思想」
『見えがくれする都市』SD選書、鹿島出版会、1980年。
初出は“日本の都市空間と『奥』”と題して、『世界』岩波書店
1978年12月号に掲載。
- 秋山喜代子（1964～ ） ← 歴史学
「中世の「表」と「奥」」
五味文彦編『中世の空間を読む』吉川弘文館、1995年。
- 伊藤 益（1955～ ）（父は萬葉学大家の伊藤博） ← 思想史学
『旅の思想 ー日本思想における「存在」の問題ー』北樹出版、2001年。

2. 研究の基本的前提

- ・ 住居（建築）をめぐる問題は、物理的なハード面と精神的なソフト面の両義的視点が必要不可欠である。

⇒本研究は、住居の精神的なるものを対象とした。

- ・ 日本人の住居観を歴史的に探究する場合、物理的な対象は日本最古の住宅（箱木家：神戸／室町時代）が限界であり、それ以前となれば、考古学資料あるいは古典文学などを通じた精神的な研究が主流となる。



箱木家住宅
(神戸市)

⇒本研究は、日本古典文学の文献学的考察に基づく
住居の精神的なものを探究した。

3. 研究の方法

- 「**日本古典文学作品**」をテキストに、
(取り上げた古典作品は、国文学的には近年あまり取り上げられていないものも含まれている。これは当時の一般人の意識を探る**心性史的**考察方法を採用したいためである。)
- そこに表象される**言説**（言葉）の読解を通して、
(人々の日常における、何気ない会話や動作などに着目)
- 日本人の「**住まうこと**」の建築論的究明をめざす。
(通常は「住居観」という言葉の方が一般的であろう。)

4. 研究の基本的な立場について

本研究は、副題に「**建築論**」と追記したように、いわゆる「**建築論の京都学派**」と称される一連の思索の系譜を辿りつつ、現代へ発展的に継承するものである。

・ 建築歴史・意匠 > 建築論 > **原論**

（日本建築学会 部門分類による）

また上記に加えて、あらたな本論**独自の視点**として、

日本的なニュアンスをもつ「**奥**」なる言葉

近年の大災害で再び浮上した「**冥一顯**」世界構造、

（平易には **死／あの世** — **生／この世** ともいえる。）

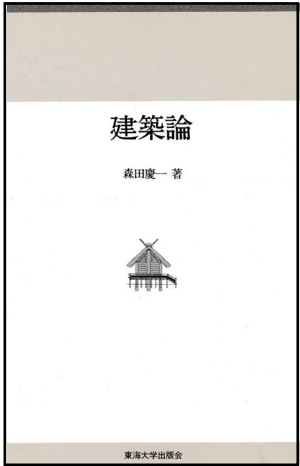
などをキーワードとして使用した。

5. 「建築論」について

広い意味では、建築論とは「**建築とは何か**」という問いに答えるためのいろいろな形の論議をひっくるめて指すと了解することができるであろう。

ここで述べようとする建築論は、建築というものをできるだけ全一的に捉えて、その本質を明らかにしようとする理論的な体系的な考察と理解しておこう。
(森田慶一 (1978) 『建築論』 東海大学出版会)

存在様態	性質	価値
物理的	物体性・合理性・技術性・構造的性	強
事物的	合目的性・効用性・実用性	用
現象的	芸術性	美
超越的	超越性・神秘性	聖



なお上記書籍は2025年12月に講談社学術文庫から復刻刊行された。

6. 「住まひ」について

「住まひ」という古語は、《スミ（住）アヒ（合）の約》であるとし、生活し続ける、ずっと住む、あるいは一緒に生活するという、コト（行為）の意がまず上げられ、その後にモノ（住居）の意が添えられている。

さらに「**住み・棲み**」については、あちこち動きまわるものが、一つ所に落ちつき、定着する意とし、スミ（澄）と同根とする。つまり「**澄み・清み・済み**」は、浮遊物が全体として沈んで静止し、気体や液体が透明になる事態としている。

（『岩波古語辞典 補訂版』）

7-1. 「奥」について

- ・ 語義

旧字体の「奥」は、𠂔（室）に采（たいまつ）を𠂔（両手）でもった状態を示すといわれ、暗い室内を意味している。

（『角川新字源』）

「外」「端」「口」の対。オキ（沖）と同根。

空間的には、入口から深く入った所で、人に見せず大事にする所をいうのが原義。

時間の意に転ずると、晩（おそ）いこと。

また、最後、行く先、将来の意。

（『岩波古語辞典 補訂版』）

奥は、外国語たとえば英語などには翻訳し難い日本語の一つといえる。

7-2. 分析概念としての〈奥〉

- ・ 渡辺白泉（1913～1965）

戦争が廊下の奥に立ってゐた （1939）

「廊下」という日常性と、「戦争」という非日常性とが「奥」という言葉で結び付けられている。
しかしこの廊下の「奥」とはどこであろうか…。

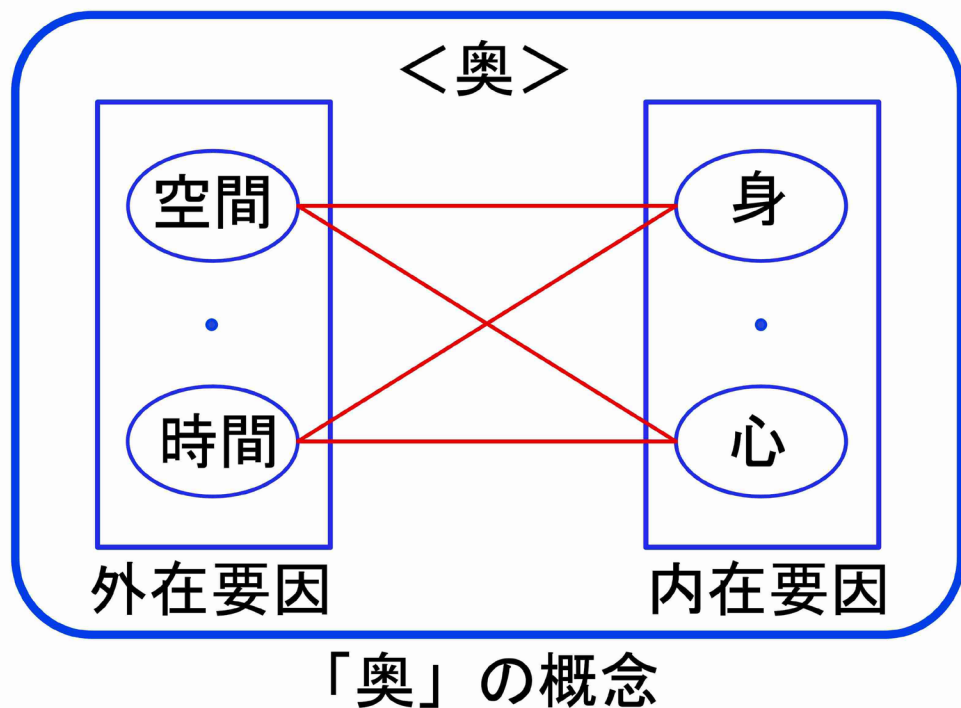
- ・ 種田山頭火（1882～1940）

分け入っても分け入っても青い山 （1926）

この句には「奥」という言葉は使われていない。
しかし句の語感からは、その奥行きが看取できるであろう。

このように直接的に「奥」なる語が使用されていない場合を、分析概念として規定する。使用されている場合は対象概念である。

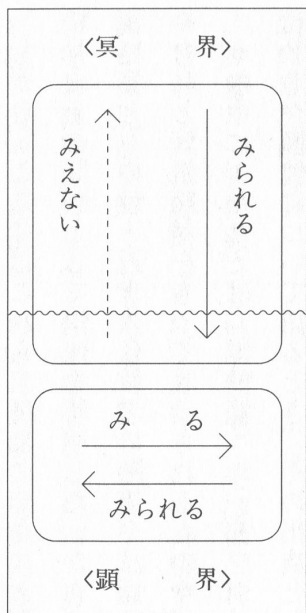
7-3. 分析概念〈奥〉のイメージ



① 空間・時間 — 身・心	
② 空間 — 身	⑥ 空間・時間 — 身
③ 空間 — 心	⑦ 空間・時間 — 心
④ 時間 — 身	⑧ 空間 — 身・心
⑤ 時間 — 心	⑨ 時間 — 身・心

〈奥〉の構造

8. 「冥一顯」世界構造（死一生）について

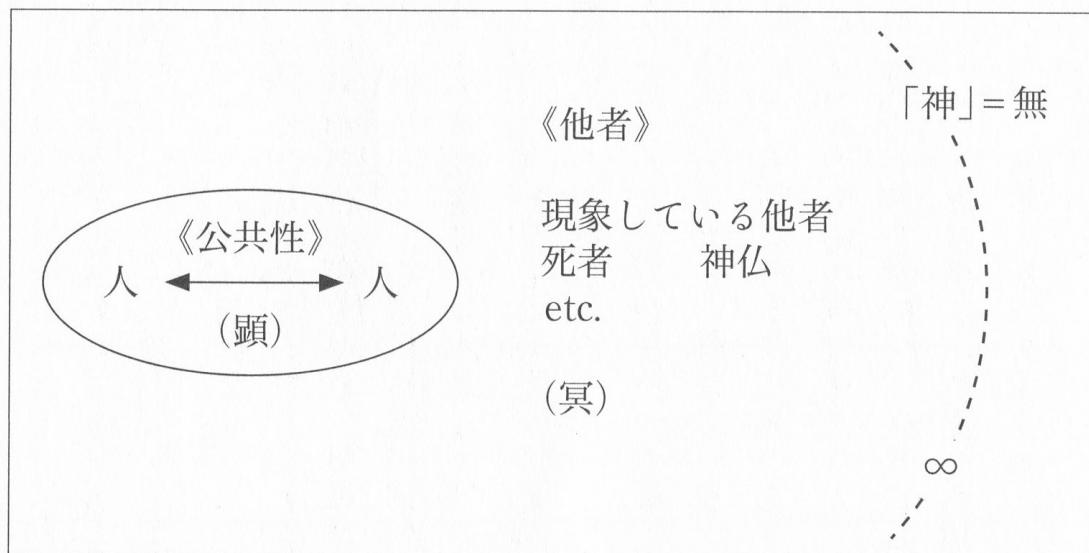
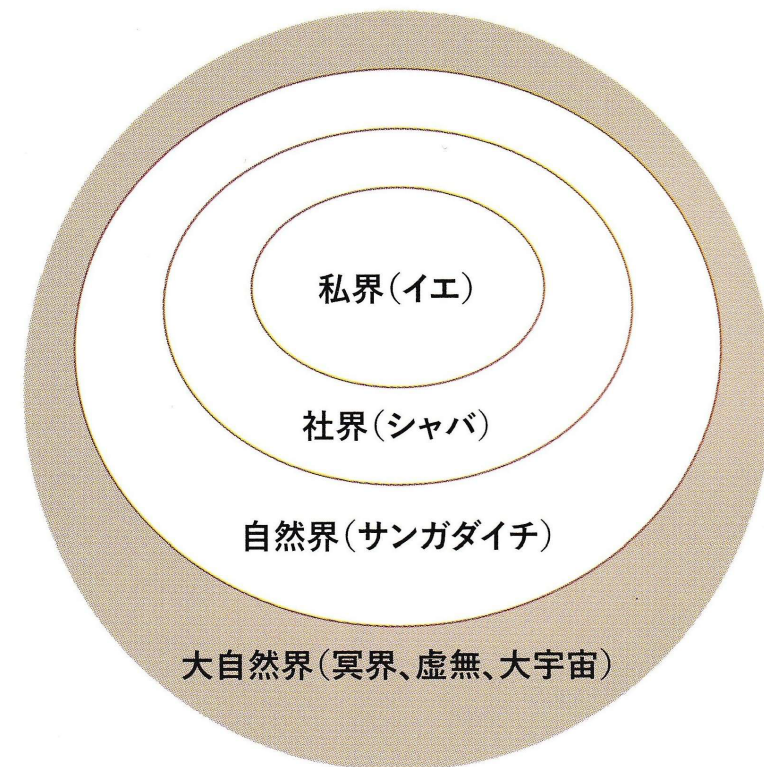


池見澄隆 (2004)
『慚愧の精神史』
(左図)

末本文美士 (2018)
『冥顯の哲学1』
(日本宗教に基づく世界観の
基本的枠組み) (下図)



図1 四界図



田路貴浩 (2024) 『KOSMOS』14号
(国際花博協会情報誌) (上図)

9. 問題の所在：現代の住まいの実相として

- 日本の住まいにおける「壁」について

（日本の住まいの「壁（仕切り）」は西洋に比して力弱いといった表現がなされる。あるいは果たして「壁」はあるのだろうか。）

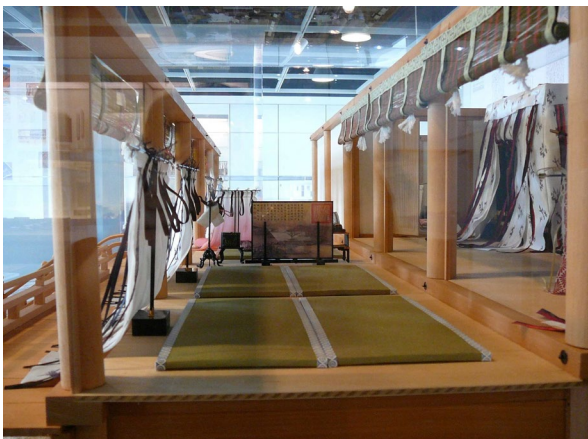
- 日本の住まいにおける「聖性」について

（本来「住まい」はそこで生まれて最期を迎える場所であった。しかしその宗教性を秘めた象徴的部分は如何様になっているのであろうか。）

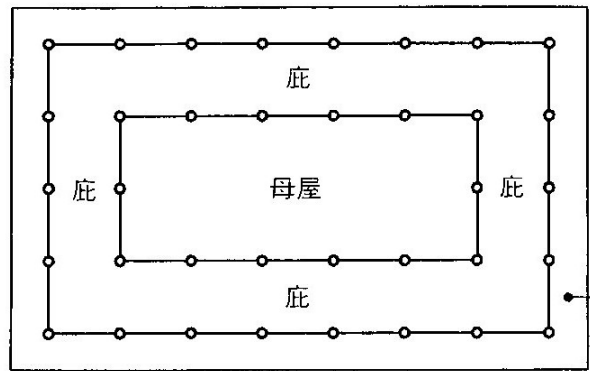
10. 寢殿造



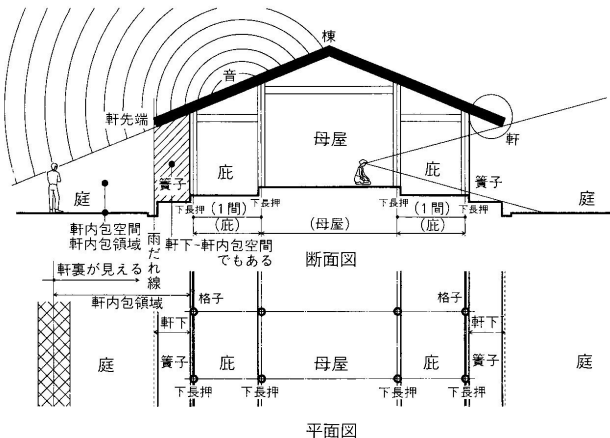
寢殿全図（沢田名垂『家屋雑考』）



寢殿造模型
（中部大学所蔵）

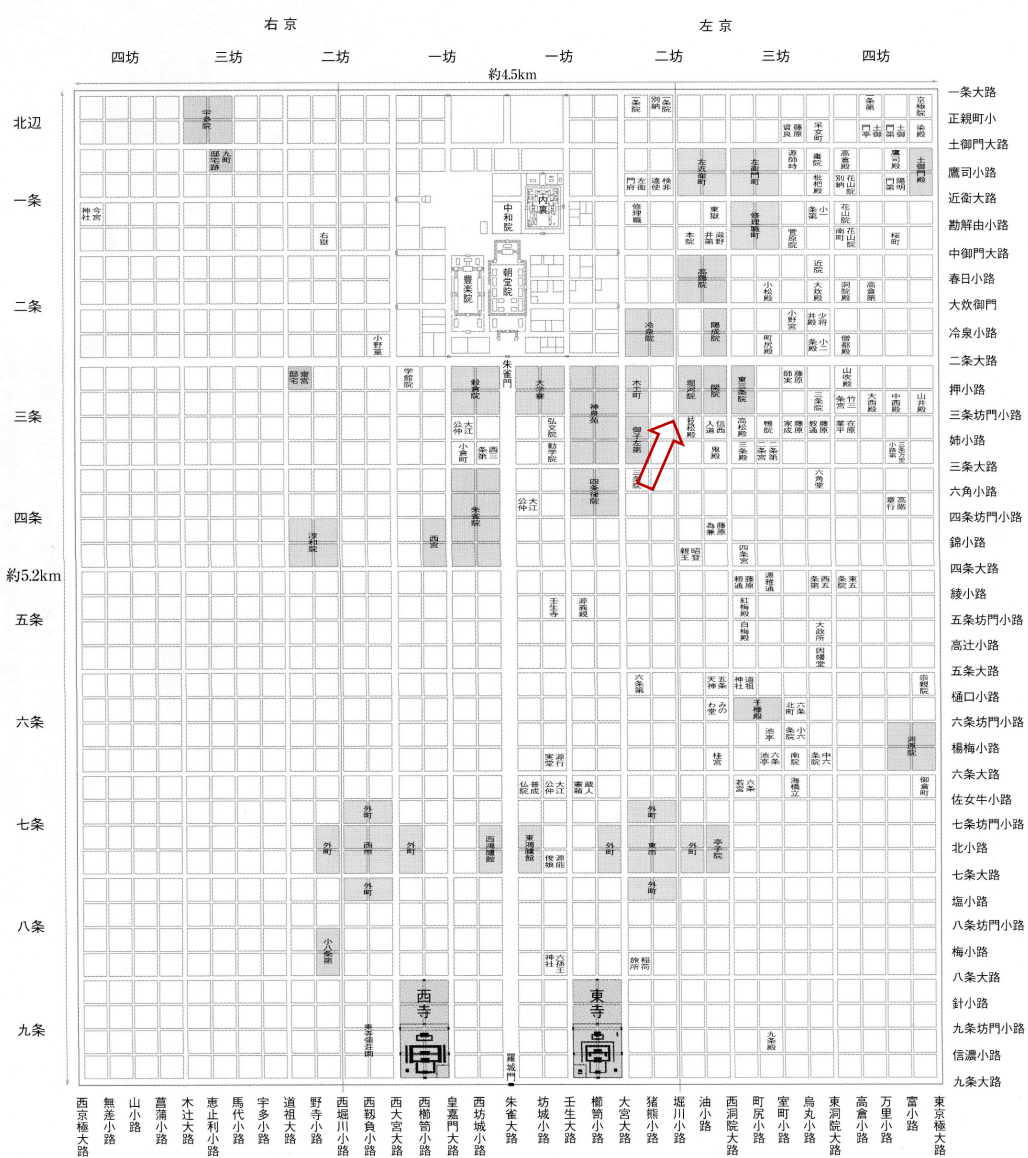


五間四面（間面記法）



平面図

安原盛彦（2000）『源氏物語空間読解』



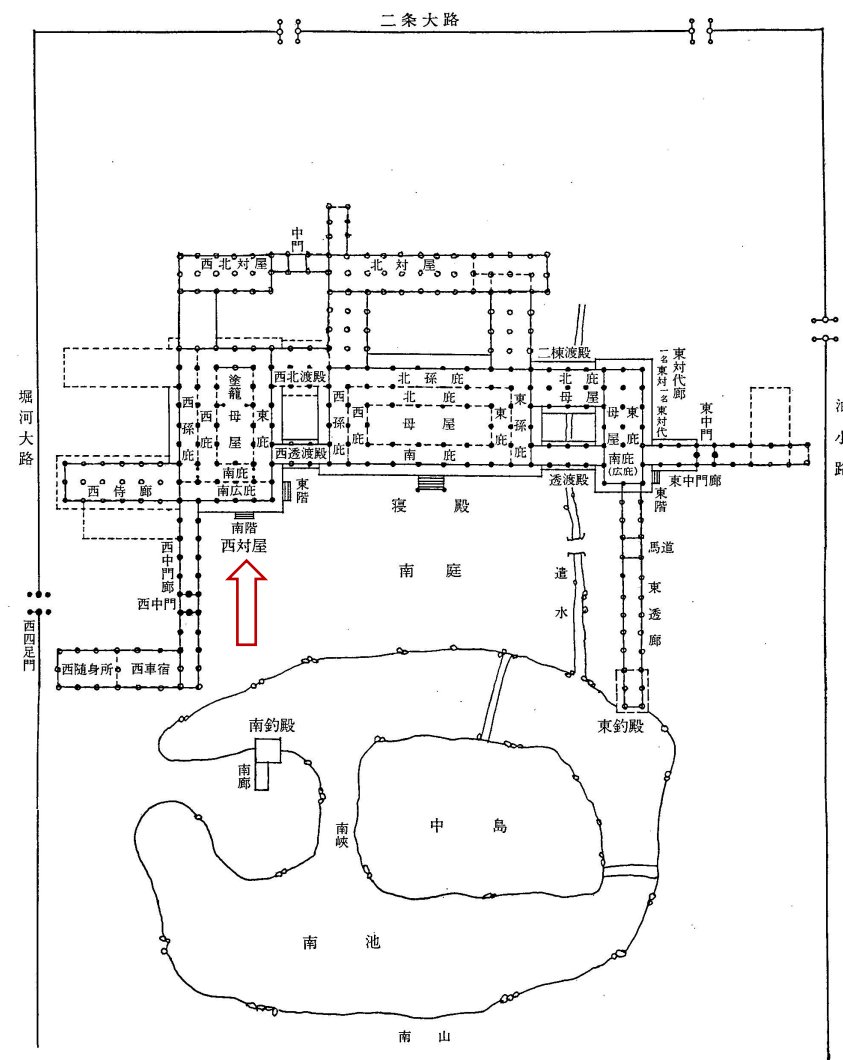
平安京

11-1. 「奥」の視点による「看取りの場所」(1)

・ テクスト：『讃岐典侍日記』（上巻）

〔8〕 大殿近く参らせたまへば、御膝高くなして陰に隠させたまへば、われも単衣を引き被きて臥して聞けば、「御占には、とぞ申したる、かくぞ申したる。御祈りは、それぞれなん始まりぬる。また、十九日より、よき日なれば、御仏御修法のべさせたまふ」と申させたまへば、「それまでの御命やはあらんずる」とおほせらる。かなしさ、せきかねておぼゆ。 (pp. 401-2)

—「奥」なる「奥」の創出（入れ子構造）—



堀河殿復元図

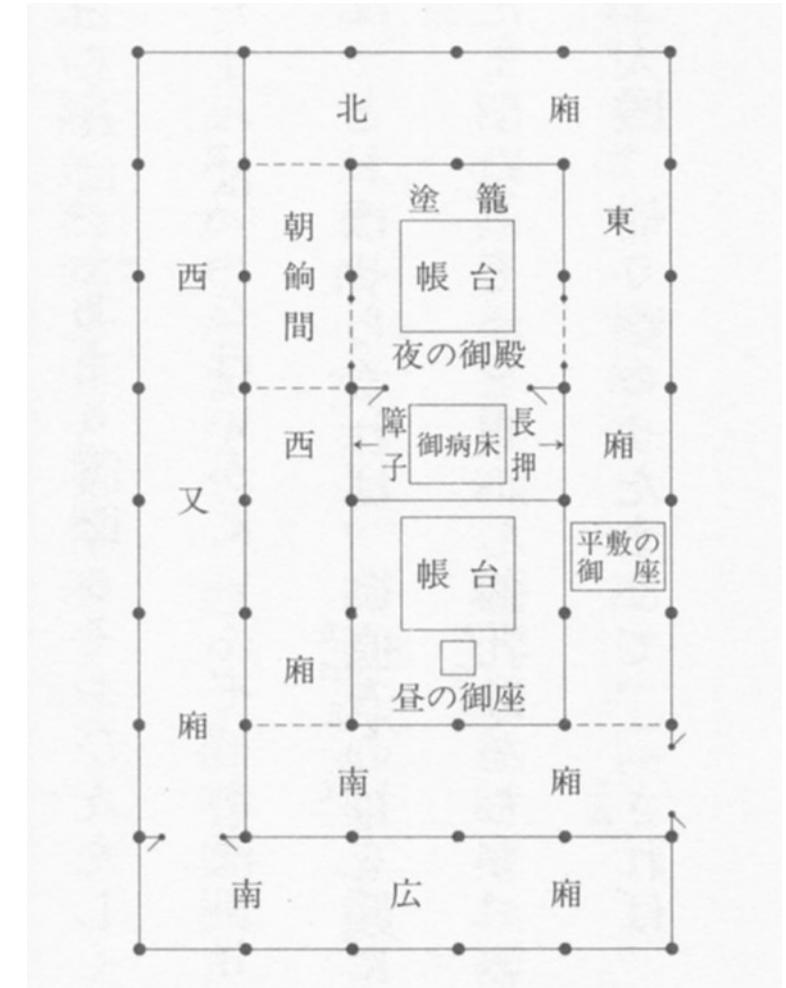
11-2. 「奥」の視点による「看取りの場所」(2)

・ テクスト：『讃岐典侍日記』（上巻）

〔21〕 御乳母たち立たれぬれば、因幡の内侍
とて、明け暮れ、あまたの内侍のなかに、
とりわきつかうまつりつきたりし人と二人、
御かたはらに無期に近くさぶらふ。

「あはれ、多くさぶらひつれど、契りふかくも
つかうはてさせたまへる」などいひつづけて、
いみじう泣かるるさまぞ、いとどもよほさるる
心地して堪へがたき。 (p. 425)

— 「冥一顯」世界像 —



堀河天皇 病床の間

12. 「見る」をめぐる

・ テクスト：『十訓抄』

(第三 人倫を侮らざる事)

性空上人の夢告譚

〔3-15〕 感涙おさへがたくして、
眼を開きて見れば、またものごとく、
女人の姿となりて、周防室積の詞を出す。
眼を閉づる時は、また菩薩の形と現じて、
法門を演べ給ふ。(p. 141)



師が鬼の姿となって示現する
『石山寺縁起絵巻』

「見える」限りの世界に住まいつつ「見えない」意味の多重
を「見」、多重の地平を生きている。(香西克彦)

13. 空間論から「すまうこと」の風景論へ

13-1. 「すまうこと」と その風景をめぐる(1)

橘曙覧「独楽吟」にみる写しとられた風景

たのしみは 艸のいほりの 筵敷き
ひとりこころを 静めをるとき (553)

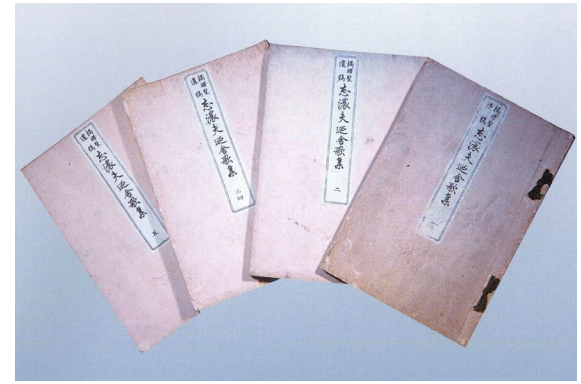
たのしみは 妻子むつまじく うちつどひ
頭ならべて 物をくふ時 (558)

たのしみは 家内五人 五たりが
風だにひかで ありあへる時 (582)

たのしみは 三人の子ども すくすくと
大きくなれる 姿みる時 (584)



橘曙覧



『志濃夫廼舎歌集』



蘂屋復元セット (福井市橘曙覧記念文学館)

13-2. 「すまうこと」と その風景をめぐる(2)

「漂泊」に生きた井上井月が詠む風景

藤さくや遠山 **うつす** 池の水 (春・379)

蓬莱の **うつる** 夜明けの **障子** かな (新年・1238)

散込やさくらの **窓** の細めなる (春・251)

のぼり立つ **家** から続く緑かな (夏・483)

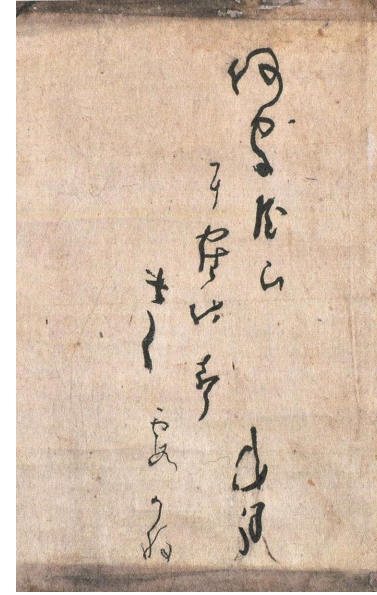
月さゝぬ **家** とてはなき今宵かな (秋・744)

打返す **枕** に虫の遠音かな (秋・871)

行暮し越路や **櫓** の遠明り (冬・1098)

落栗の **座** を定めるや窪溜り (秋・929)

何処 やらに鶴の声聞く霞かな (春・46)



井月筆（何処やらに） 晩年の井上井月



3 様態として 「住／住」
「旅／不住」
「漂泊／非住」

13-3. 「すまうこと」と その風景をめぐる(3)

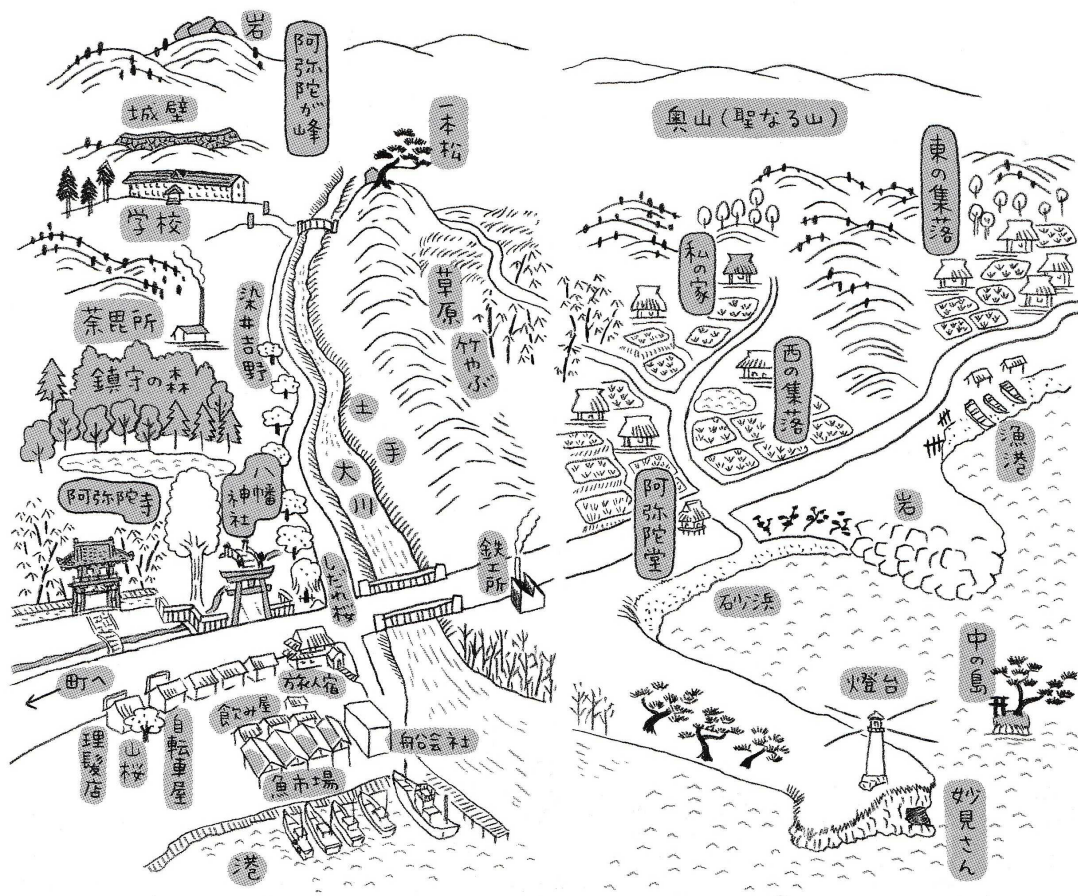
佐藤正英『故郷の風景』（左図）

里山 → 内山 → 奥山 → 岳

という風景は、現代の環境論へとつながるのではないだろうか…。

学際性をもって「建築論」を大きく継承展開した増田友也は、古代からの**條里制集落**に、すなわち区割りの方格規準線による空間的構造に、日本的景観を見出している。

増田友也『家と庭の風景 日本住宅の空間論的考察』ナカニシヤ出版、1987年。



イラスト：川口澄子

出典：佐藤正英『故郷の風景』ちくまプリマー新書、2010年

14. 問題の所在の応答として

「看取りの場所」、「見る」行為、「すまうこと」の風景、と考察を続けることにより、我々は「**今・現在**」の世界にとらわれすぎて、

「見えない世界」を「見る」ことをしなくなった

といえるのではないか。（忘却ともいえようか…）

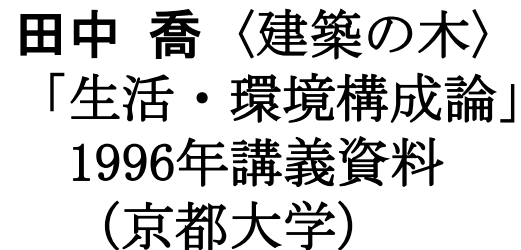
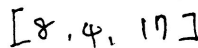
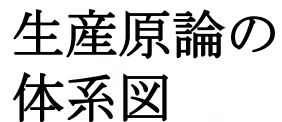
つまり「冥一顯」世界像への関心の衰退なのである。言い換えれば、

「**死ぬべき存在としての「人」であること**」を忘却していることになろう。そこに、「すまい」における聖性（超越性）の希薄化の一端を求めることができよう。

15. まとめ

日本古典文学作品をテキストに、その読解を通した新たな考察から、古代から中世、近世へと至る日本人の「すまうこと」における「壁（仕切り）」の象徴的機能や、看取りの場所性、一つの行為（ここでは「見る」こと）が開く現象の意味、さらには住まうことの本質に通じる「風景なるもの」の一端をみてきたが、今後も「建築論の京都学派」の思索に依りつつ、さらに深めていきたいと願っている。

エピローグ：生産原論 と 建築論



『建築論研究第1号』
藤原学、2019年。



初学者の私に、このような機会を与えて頂きました埼玉大学
池野順一教授をはじめとする精密工学会生産原論専門委員会
の諸先生方に衷心より篤くお礼申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。